

市制施行七〇周年記念企画展

# 大津雲山展

## — 秦野に生まれた南画家 —

### 大津雲山とは

#### 郷土の南画家、誕生

大津雲山は、明治18(1885)年、東田原村(現在の秦野市東田原)に生まれた南画家です。本名は市造で、幼い頃に雪舟の逸話を聞いたことを機に画で身を立てる決心をしたといわれています。画家を志した雲山は、まず山田永耕や森崎和三郎ら郷土の画家に手ほどきを受けます。



#### 上京と中央画壇での活躍

その後上京した雲山は小室翠雲に入門しますが、その方向性を決定づけたのは南画の伝統と近代的感覚を融合させた斬新な作風で、異彩を放った松林桂月の作品でした。最初は徴兵を理由に弟子入りを断られるも、26歳のときに入門を許可され、桂月より故郷の大山に由来する「雲山」の号を授かります。30代になると、帝展など当時の代表的な公募展に出品、入選を果たすとともに、大正天皇の御前で揮毫を行うという栄誉にあずかるなど、充実したときを過ごします。

#### 帰郷と晩年

太平洋戦争が激化すると、戦火を逃れるため60歳を迎えた昭和20(1945)年に故郷である秦野に戻ります。息子や妻に先立たれる不幸がありつつも、漢詩を嗜み、作品の製作を続け、昭和46(1971)年にその生涯を閉じました。

### 南画とは

大津雲山が描いた「南画」とは、そもそもどういった絵画なのでしょう。南画とは中国の「南宗画」の略語ですが、この言葉は南宗画そのものを示してはいません。

まずそれぞれの言葉を整理してみましよう。広大な中国では、南北で風土が大きく異なるため、その景観を描いた山水画様式も地域ごとに分類されます。江南のなだらかな地形を反映し、比較的柔らかいタッチのものは「南宗画」、華北の険しい山々を鋭く固い質感で描いたものは「北宗画」とされました。また、中国には「文人画」という概念もありますが、こちらは学問や政治をこなす文人が余暇に趣味的に描いた絵画を指し、職業画家の作品と区別されました。

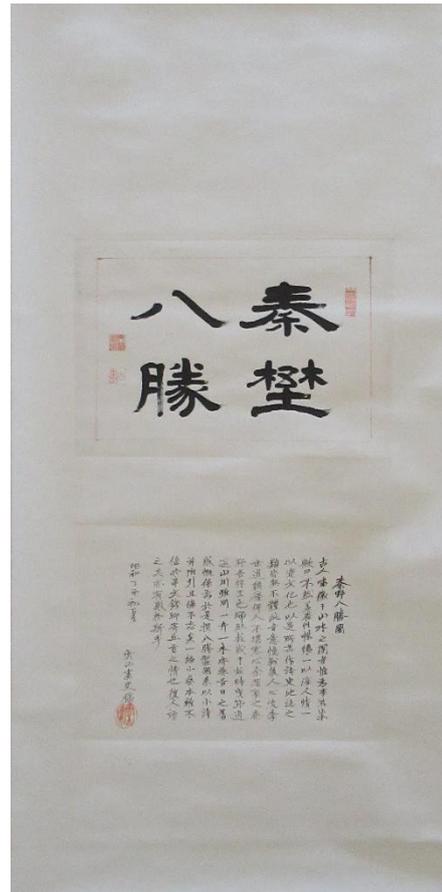
そして、「南画」とは、江戸時代に伝来した南宗画を中心とする外国からもたらされた絵画様式を基に、日本独自の解釈により発展を遂げた、「日本的文人画」を意味する用語として定着しています。その特徴は文人への憧れであり、南画家たちは技巧にこだわらない作画姿勢や絵画理論、高い教養、脱俗の生き方を積極的に学びました。

また、南宗画だけでなく北宗画や西洋絵画風の画も存在するため、既存の山水画様式の定義には当てはまらず、武士や職業画家など幅広い層に描かれたことから文人画の定義とも相容れない、まさに日本的文人画と表現すべきものとなります。

## 秦野八勝図

雲山は南画において最も一般的な画題である山水画を好んで描いており、現存する作品も自然の風景を描写した作品が大半を占めています。中には秦野の景色を題材にしたものも見られ、帰郷後に手掛けた『秦野八勝図』は中国山水画の伝統的な画題である瀟湘八景しやうしやうになぞらえて、市内に所在する景勝地を漢詩と説明文を添えて描いた連作です。序文では、故郷へ戻り杖をついて気ままに歩いてみると、山や川の景色は変わっていても、草木のひとつひとつは昔の姿ではなく、感慨深いと述べ、記憶にとどめるため八勝を選出して描き、詩を詠んだとしています。

以下に各軸に記載された文章の書き下し文とそれぞれの場所のおおまかな説明を載せています。



### 1 震生湖春漁



湖上の春暄碧として油のごとく。  
桃花、楊柳、漁舟をおおう。  
魚鰕、釣に入って烹魚足る口福、何ぞもちいん、五俵を説くを  
震生湖春漁

震生湖春漁  
震生湖は秦野平沢村にあり己亥の秋  
関東の地大いにふるい一夜にして地落ち湖おのづからなる。よつてここに名づく湖の周囲は二丁あまり水深四十ひろ  
積翠四匹桃桜  
まじわり植ゆ。倒影映発風光絵とすべし  
これをもつて遊客四時たえずことに艷陽の候鯉鮒ひび放垂釣もつともよろしと

湖畔桃杏明らかにして  
風光別様の春なり  
閑人手に竿するところ  
上釣銀鱗をおどらす

震生湖は秦野市と中井町にまたがる湖で、関東大地震により斜面が地滑りを起こし、滑落した土砂が河道を閉塞したことで生じました。ここでは湖の周囲が220m、水深7.2mほどとされていますが、現在の周囲は約1km、水深は4~1.0m程です。桃や桜の花が咲き誇り、鯉や鮒を釣って楽しむ観光客で賑わう、風光明媚な場所として描かれています。

## 2 蔵林寺躑躅



林泉幽寂として薫風好し、  
 緑樹の重陰黄気融たり、  
 花落ち鶉ないて  
 澱血を留め紛々として  
 萬叢の紅を染めなす  
 蔵林寺躑躅

蔵林寺躑躅  
 蔵林寺は大育山  
 と号し  
 秦野堀村にあり  
 延徳中  
 瑞秀祥禎  
 開基す  
 しかして寛文十三年  
 九世牧泉  
 中興す檀越  
 米倉丹後守  
 昌尹喜捨して功を助く  
 後苑の躑躅  
 その栽植する所と云う  
 晩春花時萬枝  
 妍を競い錦繡  
 満目一大花氈  
 を展ぶるが如し遊人  
 来たり翫するもの多し  
 春晚の蔵林寺千枝の  
 躑躅開く風流なる倉  
 大守かつてこれ  
 山に傍うて栽ゆ

蔵林寺は市内堀山下に所在する曹洞宗の寺院です。大育山と号し、瑞秀祥禎が享徳年間（1452～1455年）に開創しました。その後、寛文13（1673）年には領主米蔵丹後守昌尹が先祖重継供養のため本堂を建立し、以降米蔵氏の庇護を受けます。ここに描かれたツツジもその際に植えられたものようですが、現在は見られず、代わりに6月には参道にアジサイが咲き誇ります。

## 3 天王廟石雞



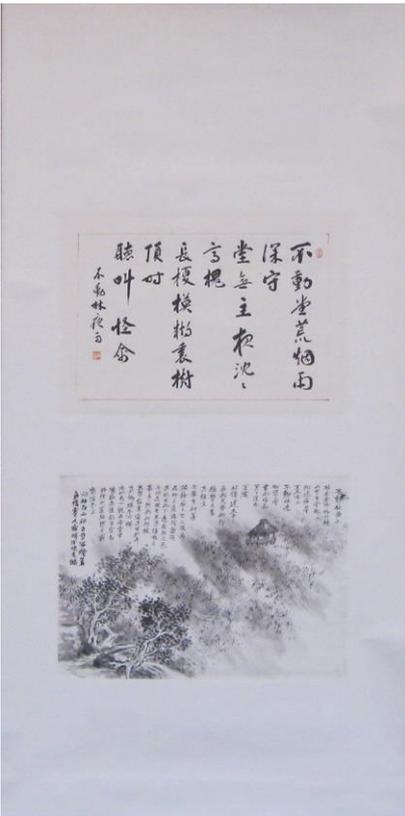
樹間の古廟、谿を  
 へだてて明らかなり  
 峽に架するの虹橋  
 碧泓に俯す  
 湛露の瀟風  
 日の夕べ石雞きそい  
 奏す振鈴の声  
 天王廟石雞

天王廟石雞  
 廟は里の巽位、金目、葛葉  
 二川相會するの所  
 午頭天王を祀る  
 御門の里の鎮守神なり  
 伝え謂う  
 平親王将門の  
 遺趾則ち龍門寺  
 山門はその造営する所なり  
 今廢して礎石なお存す  
 廟下の  
 清溪  
 一橋を架す  
 水澄み底あらわる  
 夏時  
 風の夕べ欄にもたれて  
 俯仰すれば  
 金襖子  
 意を得て乱れ嘶く  
 七絃の琴を鼓するが如く  
 九子の鈴を振るが如し  
 叢林祠廟を擁し  
 層翠前谿に映ゆ  
 最も是れ朱炎の夕べ  
 清涼石雞を響かす

天王廟とは、市内元町に所在する牛頭天王を鎮守とする八坂神社のことを指しています。近くに龍門寺という寺院があり、かつて存在した山門の造営に関わったようです。石雞とは岩石を流れる川の意味で、廟の手前に描かれた川のせせらぎとカエルの鳴く声を琴や鈴の音に例えて描写しています。現在でも境内から裏手の方に下ると金目川が流れており、天王下橋という橋がかかっています。

## 4 不動林夜雨

不動堂荒れて烟雨深し  
守堂主なく夜沈々たり  
高槐長榎模湖のうら  
樹頂時に聴く怪禽の  
さげぶを  
不動林夜雨



不動林夜雨  
林は秦野柳川村の山中  
にあり。堂あり阿遮羅尊をまつる  
里人呼んで  
不動林という老樹  
翳蒼して昼なお暗し  
もつとも淫雨  
冥濛としてよろし  
相伝うに建久中蘇我兄  
弟復讐祈願のところ  
その願文今村署に  
蔵有す。按ずるに鎌府の世  
大磯花柳の区となり  
諸將遨遊その地ここをさる  
子と遠からず蘇我の邑亦  
相近し、いわんや兄弟昵妓  
の事あらんか然らばすなはち  
この地或いは兄弟ひそかに来たつて  
祈ること未だ知るべからざるのみ  
真偽断ずべからずともいえども  
亦もつて一説を存すという。今堂宇  
壊敗して復顧みるものなし空しく  
狐狸の窟となす。千載  
緬想して感愴やまず  
祠林夜雨しげく古壁灯篝  
をもらす又賽人の宿すること  
なく時に聴く老鳩の鳴くを

市内柳川の林の中にある柳川山不動院を描いたものです。『曾我物語』で有名な曾我兄弟が父の仇を討つために願掛けをしたという伝説が残っています。雲山もその真偽は分からないとしつつ、長い年月が経ち、参拝する人もいなくなってキツネやタヌキの住処となってしまったお堂に、ただミミズクの鳴き声がこだまする様子を悲しんでいたようです。

## 5 無水川秋月

秋霖やややんで  
漫波こゆ  
無水の川頭夜色  
かすかなり  
瀧気天に横たわつて  
拭くよりきよし  
月光激灑涼輝  
をただよわす  
無水川秋月



無水川秋月  
川は秦野戸川村近傍の総称なり  
平日は水かれ磧出でて徒して渡るべし  
これその所の名よつておこるか  
しかして霖雨ひとたび到らば  
水勢滔々として田畝を濫没す  
口碑に往昔僧空海  
巡錫の次をもつてたまたま  
ここを過ぐ。鉢中物なく  
舟人に告ぐるに実を以て  
渡を乞う。舟人罵りかつ肯諾せず  
乃ち錫を津頭にたてて  
一呪を唱えて去る。則ち河水  
たちどころに涸れ今におよぶと云う  
憶うに聖者は衆生済度  
をもつて心となす。何ぞこの事  
に有るをえんや。誣妄信ずべからざるは  
大概かくのごとし。しかれども  
中秋の夜、一天空闊蟾光千里、  
川流金をおどらす  
これ対すれば塵念とみに消す

秋雨平川は満ち  
気清くして風露多し  
中天月三五  
皎々として金波を漂わす

水無川は塔ノ岳に源を發し、秦野盆地を流れる河川です。当時から水が少なく歩いて渡ることができたようで、その由来とされる弘法大師の伝説を紹介しています。それによると、かつては舟で渡るほど水があふれており、渡し場を訪れた弘法は舟に乗せてほしいと船頭に頼みましたが、身なりの貧しさから断られます。見かねた弘法は法力で水を干上がらせてしまったといいます。

## 6 弘法庵晩鐘



翠微連互  
小崔嵬  
宝宇雲封して白幾堆  
落日、蒼茫として、人定まる  
の後、鯨音隠々として  
山をわたりて来る  
弘法庵晩鐘

弘法庵晩鐘  
庵は駅東一里ばかり  
大根村弘法山上にあり  
僧空海護摩を修する  
の道場なり  
洪鐘あり  
享和元年再鑄に  
かかわる  
もしそれ  
夕陽西に春つき  
暮色蒼然たり  
隠々の声  
おのずから幽寂の中より  
来る  
鐘銘にいわく  
それ当山往昔  
云々とあり

薄霧模糊として白く  
梵宮暮色深し  
秋風吹きて断ぜず  
隠々として鯨音を送る

弘法山は市内東部に所在する低山で、こちらの名前も弘法大師が行ったとする伝説に由来します。本文で言及されている、享和元（1801）年に再鑄された鐘は、戦時中の供出を免れ、現在も山頂に残されています。文中の「鯨音」は鐘の音を意味し、周辺がうっすらと霧で白んだ秋の夕暮れ時に、鐘の音が山を超えて響き渡る様子を描写しています。

## 7 実朝塚夕照



帰鴉は翻舞して後先  
して還る。落木  
蕭疎たり晚齋の間  
道是將軍骨を  
埋むる地、一基の輪塔  
邱山に冷やかなり  
実朝塚夕照

実朝塚夕照  
塚は秦野田原村小邱上にあり  
承久元年源実朝害にあう  
武常晴実朝の首級を  
奪いて  
この地に逃れ来る  
僧行勇を招請して  
うずめ  
五輪塔を建てて標となす  
爾来物換り  
星移り  
弔古の人なく  
苔碑むなしく  
むしばむ  
荒草ほしいままに横たり邱樹  
多く枯る余一拝すること  
今だかつて今昔の  
感きにあらざるなり

疇無く古邱に接し  
枯木夕陽かすかなり  
荒塚人のとむらうなく  
風は寒し七百秋

市内東田原に所在する市指定史跡、源実朝公御首塚を描いたものです。実朝が甥の公暁に暗殺された後、三浦の武将である武常晴が行方不明になった実朝の首を探し出し葬ったと伝わっています。弔いに訪れる人もなく、草木が荒れた中にたたずんでいる前で、苔の生えた碑を前にして当時からおよそ700年前の出来事をもの寂しく振り返っています。

## 8 雨降山晴雪



形雲地勢をおおい

輪困たり密雪

霏々として織なること

塵に似たり晴暁の

山容ことに壯絶

玲瓏突起す

玉嶙峋

雨降山晴雪

古香書屋主人榮

雨降山晴雪

雨降山一名阿夫利

梵語の如意の訳なり

山勢孤起して千仞に屹立す

山頂堂宇あり

石尊大権現及び不動明王

をまつる。天平勝宝七年僧

良弁創するところ維

新の後官神佛

合祀の禁ありこれに依つて

仏を廃し神を置く

山中巖々維れ石老木

鬱葱たりこれをもつて山巔

四時雲鎖し雨うるおう

この名あるのゆえんなり

冬期早きより寒く膝六威を

ふるへば山容一変す

さながら

官人の王冠にして

天に朝するに似たり

すこぶる壯觀をなす

山峰暮雪晴れ斜照

断雲の間、名家の手を

借り得て玉扉顔を描きなす

雨降（阿夫利）山は秦野市と伊勢原市にまたがる大山の別名で、天平勝宝7（755）年に良弁僧正が開創した大山寺の縁起について触れています。明治時代の廃仏毀釈により神社が建てられ、寺は現在の場所へ移されました。山頂は四季をとおして雲におおわれ雨がちであったことが「雨降」の由来であるとしつつ、冬期には雪が降り、雲の切れ間から光が差す様は一変して壯觀であると述べています。

## 市内に残る雲山の足跡

晩年に故郷秦野へ戻ってきた雲山は、その後も作品の製作を続けました。昭和45（1970）年4月には、彼の画業を称えるため、大津雲山画伯顕彰記念碑建設会が組織され、同年11月3日に建碑が行われました。場所は秦野八勝図の題材にもなった弘法山であり、碑は彼の出生の地である東田原に向けられました。しかし、建碑の翌年の4月23日、86歳のときに雲山はこの世を去ります。墓は幼い頃に仏弟子として入門した東田原の金剛寺に建てられました。金剛寺の周辺にはこちらも八勝の一つである実朝公御首塚が所在し、かつてと変わらない田園風景が広がっています。みなさんも郷土の画家も目にしたであろう景色に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



顕彰記念碑  
(弘法山)



大津雲山の墓  
(金剛寺)

市制施行70周年記念企画展  
大津雲山展－秦野に生まれた南画家－

令和7年3月29日(土)～5月25日(日)

〒259-1304 秦野市堀山下 380-3

はだの歴史博物館

TEL: 0463-87-5542

FAX: 0463-87-5794

